

研究機関名：東北大学

1.受付番号	2024-005
2.研究課題名	Self-Perceived Food Literacy 尺度の日本人成人サンプルにおける妥当性
3.研究期間	令和 6 年 8 月（倫理委員会承認後）～ 令和 9 年 3 月 31 日
4.研究の概要	意義・目的（研究の背景・目的や倫理的項目についての確に記すこと。） 不健康な食習慣は現代において主要な健康リスク要因であり、身体的健康のみならず精神的健康やパフォーマンスにも負の影響を与えることが指摘されている。そのため、食に関連する意思決定過程について理解し、食習慣のポジティブな変容のために重要な要素を特定することは喫緊の課題である。しかし個人の食習慣の形成には個人的、社会文化的、環境的な多数の要素が複雑に関与しており、いまだに全体的な把握には至っていない。近年では、人が食に関する意思決定や具体的な行動を行う際に働く心理的プロセスをモデル化しようとする動きが欧米を中心に盛んになっている。「Self-Perceived Food literacy」尺度は、個人のフードリテラシー（ニーズを満たし、摂取量を決定するために食品を計画、管理、選択、準備、および食べるために必要な相互に関連する知識、技能、および行動の集合体）についての自己認識を評価する目的で 2018 年にオランダで開発された 8 因子 29 項目の尺度であるが、日本語版は作成されたばかりであり、日本人サンプルにおける妥当性の検証は進んでいない。 そこで本研究では日本人標本において SPFL の因子妥当性、基準関連妥当性、内的一貫性が認められるかを検証する。これによってフードリテラシーという観点から日本人の食生活に関連する問題を分析する土台を築き、将来的には世界人口の健康の保持増進、生活の質の向上に広く貢献する知見をもたらすことをめざす。 方法（研究に必要な対象者人数、年齢構成、性別、および対象者を選ぶ方針・基準も記すこと） 対象者 20～80 歳で、医療・栄養の専門知識を持たない日本の成人 300 名程度 実施方法 オンラインでアンケートを実施する。内容は、食事や健康に関する知識・技能および自身の食習慣、個人的な性格や価値観について選択式で尋ねる 70 項目である。一部の項目は対象者にストレス状況を想起させ、不快感を与える可能性がある。説明文書中に相談窓口の連絡先を示し、必要があれば適切なケアにアクセスできるよう配慮する。 対象者への説明 研究目的や方法、結果の処理について十分な説明を書面で行った上で質問紙調査への参加同意を得る。説明には、調査への参加は自由意志によるものであること、調査への協力の有無による不利益を被ることがないこと、調査結果は研究の目的以外には使用しないこと、データは個人が特定されない形で扱われること、データは研究終了後に情報の流出を

	防止する適切な措置のもと、東北大学教育学研究科伊藤研究室で保管し、論文発表後 10 年経過後破棄すること、相談窓口となる連絡先を明記する。
	問い合わせ・苦情等の窓口（講座・研究室の連絡先を記入し、研究者の個人名は記入しないこと） Tel: 022-795-6143、Mail:ayahito.ito.c2@tohoku.ac.jp

（紙面が不足するときには、罫線の縦幅を任意に増やし、次頁送りにしてください。）